

# 呉澄と音韻学 2題

富平美波

## 0. はじめに

本稿で取り上げる呉澄（字幼清 1249-1333）<sup>(1)</sup>は、著名な南宋～元朝時代の大儒で、生前多くの学徒を教導し、同時代の学術に大きな影響力を持っていたのみならず、著作などその残した業績においても、中国の経学史・思想史の研究上逸すべからざる人物とみなされている。ただし、音韻など小学の分野は、彼の業績の中心部分を占めるものではなく、その方面の専著にも乏しい。けれども、彼も古典的中国の学者の1人として、経学の附庸としての音韻・文字・訓詁に無関心であったはずはなく、経書や諸子を丹念に読み込んで多くの著作を残しており、それらが後世重んじられていることから、その方面の知識が当時として相当程度の水準に達していたことが想像されるのである。本稿では、彼の漢語の音韻についての知識の一端をうかがい知るよすがとして、彼の著作中に見える音韻に関連する叙述2種を紹介したいと思う。ただし筆者は現在までのところ、呉澄の著作のうち現在見ることのできるものをすべて調査済みであるわけではないので、この2種が呉澄の音韻に関する叙述のすべてであるとは断言できないことをおことわりしておかなければならない。

## 1. 「切韻指掌図節要序」

『呉文正集』巻十七に収録されている序文である。題名・内容から見て、楽安（元の江西行省撫州路所属。現在の江西省楽安县。）の人である陳晋翁の著作『切韻指掌図節要』に寄せた序文と考えられるが、その中で呉澄自身の三十六字母に関する考え方が披瀝されている。全文を引用すると次のようである。

「声音用三十六字母尚矣。俗本伝訛而莫或正也。群当易以芹、非当易以威。知徹牀娘四字宜廢、圭缺群危四字宜増。楽安陳晋翁以指掌図為之節要、卷首有切韻須知、於照穿牀娘下註曰、已見某字母下。於經堅輕牽擎虔外、出肩涓傾圈瓊拳。則宜廢宜増、蓋已瞭然。晋翁純篤力学、至老不倦、豈徇俗踵訛者所敢望哉。故其著述有見如此而余之為是言亦可与言而与之言也。」

（声音について述べるのに三十六字母を用いる習慣になって長いことになる。しかし、世間に行われているものは間違った形を伝えており、まだそれを正そうとしたものがない。「群」母は「芹」母に改めるべきであり、「非」母は「威」母に改めるべきである。「知」・「徹」・「牀」・「娘」の4字（母）は削るべきであり、「圭」・「缺」・「群」・「危」の4字（母）を増やすべきである。楽安の陳晋翁氏は『切韻指掌図』のために「節要」を作っておられるが、その巻首に「切韻須知」があって、「照」・「穿」・「牀」・「娘」母の下に「すでに某字母の下に見えている」と注しており、また、「經」・「堅」・「輕」・「牽」・「擎」・「虔」のほかに「肩」・「涓」・「傾」・「圈」・「瓊」・「拳」を出している。（従来の三十六字母のうち）何を削って何を増すべきか、すでに氏ははっきりと

知っておられるのである。晋翁氏は老年に至っても倦むことなくまじめに学問にいそしんで来られた方で、俗説に従い間違った知識に追随しているような者達などとても比べものにならない。故にその著述がこのように見識に富んでいるのであって、私がこのような文章を寄せるのも、まこと学問の道で交わりを持つべき人と感じたからのことである。)

『切韻指掌図節要』の著者陳晋翁の経歴について筆者は呉澄の序文の述べるところ以外明らかにしえていない。またその著『切韻指掌図節要』もおそらく残存しない文献ではないかと思われる。音韻学関係の文献を豊富に挙げている李新魁・麦耘氏の『韻学古籍述要』<sup>(2)</sup>にも見えないし、清・謝啓昆の『小学考』も、「陳氏晋翁切韻指掌図節要、二卷、見呉澄文正集、未見。」と記して呉澄の序文を引用しているのみである(卷三十一)。もちろん『四庫全書』の「存目」にも見えない。少なくとも清朝時代から、呉澄の序文以外にその内容を知りえない文献となっていたのであろう。曹述敬氏主編の『音韻学辞典』は「陳晋翁」と「切韻指掌図節要」を項目に立てているが、「切韻指掌図節要」については「原書已佚。」と明言しており、呉澄の序文の記述によって、内容の紹介を行っている。また、同辞典が陳晋翁について、「南宋」の人ともまた「元」の人とも言っているのは、どのような考証に基づいたものか不明であるが、その経歴について述べられているところは、やはり呉澄の序文に基づいているように思われる。

呉澄に三十六字母を改訂する意見があったことは、後代の明・方以智『通雅』卷五十「切韻声原」、清・方中履『古今积疑』卷十七(「切字积疑」)「字母増減」の条、清・潘耒『類音』<sup>(3)</sup>、清・李汝珍『李氏音鑑』<sup>(4)</sup>などに指摘されており、方以智や潘耒は字母を「増加させる」ことを議した説と言いつけている。呉澄にほかにも字母について述べた文章があつて彼らがそれを見ることがなかったとは言いつけないが、方中履の「切字积疑」は上記の「切韻指掌図節要序」を引いて呉澄の字母説を論じているから、我々もこの序文から呉澄の「増」字母説をうかがい見てさしつかえなかつたと思われる。

「切韻指掌図節要序」に表された呉澄の三十六字母に対する改訂案は、呉澄個人の見解として出されているものと、呉澄自身の見解でもあり、陳晋翁も同様の考え方を持っていることが「切韻須知」の記述からうかがえるものの両方からなっていると言つことができよう。陳晋翁が三十六字母に加えた批評がこの序文に言われているものだけであるのかどうかは原典が見られない以上明らかにしがたい。呉澄が自身の見解と一致する点のみを取り上げていることがないとは言えないからである。したがつて、この序文に述べられているのは、あくまでも呉澄の主張であるとみなしたほうがよかつた。以下、その具体的な内容について見て行くところ。ところで、この「序」の呉澄の叙述にしたがえば、呉澄は従来の三十六字母から「非」・「知」・「徹」・「牀」・「娘」の5母を削り、「威」・「圭」・「缺」・「群」・「危」の5母を増して、差し引きやはり「三十六」字母となる。李汝珍の『李氏音鑑』も呉澄の字母説について「呉草廬三十六字母」と称しているとのことである<sup>(5)</sup>ので、このような数え方で間違いないと思われる。呉澄の「序」が、世間に通用している三十六字母が間違つた形で伝わっているので、それを正した、と述べている所以であらう。そういう呉澄の態度を重視するならば、呉澄は厳密な意味で「字母を増す」革新性にまでは至っていないと言つてもできる。

①「非」母を「威」母に変える。

軽唇音の「非」母と「敷」母が区別しがたいために「敷」母1つに統合したものと思われる。そして呉澄はそのかわりとして中古音で「影」母合口の字である「威」(中古、止摂平声徹韻合口影母)を持ってきている。これは、零声母合口音節の頭音を代表するものとして立てられたも

のではないかと思われる。「威」は中古音では合口拗音の音を持つ字であるが、元朝時代成立の韻書『古今韻会舉要』(1297)や『中原音韻』(1324)でもすでに拗介音〔-i-〕を失って(例えば[-uei]等のようになって)いると推定されている小韻に属している。呉澄自身の念頭にあった音もそのようであったとすると、この「威」母は韻母初頭の合口介音の円唇性をとらえたものかもしれないし、(当時の音において影母が声門破裂音を保持していたかどうかとも問題になるところではあるが)或いはそれらの音節が例えば[w]のようなかなり子音的な音で始まっていることを示すものかもしれない。それが「唇音」であるととらえられ、唇音字母の空き間である「非」母の後へ入れられたものであろう。中古音の「影」母は『韻鏡』などで「清」に分類される字母であって、声調が陰・陽両調に分かれる場合は陰調となる音節に現れるものなので、「非」母の後の位置には適しているわけである。楊耐思氏は「元代漢語的濁声母」<sup>(6)</sup>の中で表「元人所伝字母清濁表」を作成し、「陳晋翁」・「呉澄」・『新編纂図増類群書類要事林広記』の「六十字訣」・陶宗儀『南村輟耕録』「射字法」の4種の字母を対照しているが、その「備注」の中で次のように述べているのは、これとほぼ同様の解釈をしているものと思われる。

「威接微后，为微之清，疑为u起头的零声母。」

楊氏は「漢語“影、幺、魚、喻”的八思巴字注音」<sup>(7)</sup>において、『古今韻会舉要』等の「影」・「幺」・「魚」・「喻」母を一律に零声母であると推定しているから、このような解釈を行いやすいのだと思われる。ちなみに、呉澄のこの改定に対し、方中履は「切字積疑」の中で、おそらく等韻学の知識に基づいて、次のような批判を述べている。

「草廬發此論端，可謂卓識。然非豈可易威。威乃喉声影母。非乃輕唇、殊不相及。」

②「知」・「徹」・「牀」・「娘」の4母を削る。

陳晋翁が『照・穿・牀・娘』母の下に『すでに某字母の下に見えている』と注している点を呉澄が評価していることからわかるように、舌上音の「知」・「徹」・「澄」と正齒音の「照」・「穿」・「牀」とはすでに分かちがたくっており、3組の字母を統合する考えがあるのであろう。また、「娘」母については明確に述べられていないが、おそらく「泥」母に合わせられたものと思われる。上のような合併のしかたは『中原音韻』からすでにそうであるし、続く明・清時代の韻書・韻図などでよく採用されているところである。曹述敬氏の『音韻学辞典』は「切韻指掌図節要」が

「知徹澄娘四母已廢，并入照穿床泥四母。」

であると述べている。

③「群」母を「芹」母に改め、「見」・「溪」・「芹」・「疑」のほか「圭」・「缺」・「群」・「危」の4母を増やす。

牙音について、2種の声母を別の字母として立てる主張である。呉澄が、陳晋翁の『経・堅・輕・牽・擊・虔』のほか『肩・涓・傾・圈・瓊・拳』を出していることを評価しているのも、自分のこの考えに通じるころがあるからであろう。陳晋翁の挙げているこれらの文字は、開口のほうの6字(「経」など)について言えば、韻図などの字母の理解のために付されることの多い(「帰納」助紐字)の類とちょうど一致しているから、あるいは「切韻須知」の三十六字母表などの下に記載されていたのかもしれない。先に挙げた楊耐思氏「元人所伝字母清濁表」によると、これら6字は『事林広記』の「六十字訣」所掲のものと同じであるし、『南村輟耕録』のものとは「群」母の第1字目が異なるだけである。『韻鏡』巻首所掲の「帰納助紐字」も「群」母第1字目がこれと異なっており、「群」母についてやや揺らぎを持ちつつ一貫して傳承されてきたものなのであろう。さて、呉澄・陳晋翁の挙げている「字母」字と「助紐字」は中古音では

次のような音を持っている字である<sup>(8)</sup>。

見（山攝去声霰韻開口見母）經（梗攝平声青韻開口見母）堅（山攝平声先韻開口見母）  
溪（蟹攝平声齊韻開口溪母）輕（梗攝平声清韻開口溪母）牽（山攝平声先韻開口溪母）  
芹（臻攝平声欣韻群母）擎（梗攝平声庚韻三等開口群母）虔（山攝平声仙韻開口群母三等）  
疑（止攝平声之韻疑母）  
圭（蟹攝平声齊韻合口見母）肩（梗攝平声青韻合口見母）涓（山攝平声先韻合口見母）  
缺（山攝入声屑韻合口溪母）傾（梗攝平声清韻合口溪母）圈（山攝平声仙韻合口溪母三等）  
群（臻攝平声文韻群母）瓊（梗攝平声清韻合口群母）拳（山攝平声仙韻合口群母三等）  
危（止攝平声支韻合口疑母三等）

このように、中古音の観点から見ると、呉澄の「圭」・「缺」・「群」・「危」母は、「見」・「溪」・「群」・「疑」の4声母から合口三・四等の声母を独立させたもののように見える。従来の字母のうち「群」母はそれ自身が合口三等の字なので新しく独立した声母の代表字とされ、もとの声母を表す字母は「芹」に取り替えられた。ところで、従来の字母「見」・「溪」・「群」・「疑」やそれらの「助紐字」がはからずもすべて三・四等字であるために、これらの新しく設けられた字母が、合口拗音であることに意味があるのか、それとも従来の字母や「助紐字」に合わせるために三・四等字を選んだだけで、実は（開口音節と対照しての）合口音節の頭音を代表しているのか、にわかに判然としないのである。この点などは、今後、明らかに呉澄の手に成ったとわかる音注類でもあれば、その反切上字の使用のありさまなど観察してみるのがよいかもしれない。

呉澄がこれら4字母を増やした理由について、2つの（或いは後述する李新魁氏の説を加えて3つのと言うべきか）解釈がなされている。1つは、いわゆる「声介合母」の方法によって増された字母だという解釈である。中国の音韻学の伝統においては、反切や切音字、切脚語などから観察されるように、音節を前後2つの部分に分析する場合、介音の前で分断するのと、介音の後ろで分断するのと、2つのやりかたがあつて、その区切りが明確でない。したがって、「声介合母」の方法によって多数の字母を立てている音韻学書も往々見かけられる。ただし呉澄の4母がもし韻母の最初に[u]を有する合口の音節のために設けられたとしたならば、開・合両方の韻母と結合関係を持ちうる声母はほかにもあるだろうから、おそらくもっと多くの字母を立てねばならず、「影」母及び牙音の5母だけにはとどまらない可能性が大きいと思われる。この点について、方以智の「切韻声原」の述べているところは参考になりそうである。すなわち、方以智によると、呉澄らの字母増補の原因は、

「凡議增母者、為迕状粗細不同也。」

「吳幼清、陳晋翁、熊与可、趙凡夫皆欲加母、以迕状不明也。」

ということなのであるが、この「状」という用語は、李新魁氏『漢語等韻学』等によれば、結局「開口呼」・「合口呼」（以上2つは「粗」）・「齊齒呼」・「撮口呼」（以上2つは「細」）の四呼の区別を指しており、「迕状」とは、特定の声母の下ですべての「状」が完備しない事実を言うものらしい。方以智の言うところでは、「真」・「文」・「恩」・「庚」・「青」・「蒸」・「侵」諸韻の字ならばすべての声母のあり得る「状」を完備しているので（「状」について解説する場合などの）例に用いるにふさわしいのだが、それでも同じ声母の下に4「状」を完備しているのは牙・喉音（方以智の「見」・「溪」・「疑」・「曉」母）のみである。実際「切韻声原」所掲の韻図を見ると、中古「臻」攝の字及び「曾」・「梗」攝の字から成る2つの「攝」の牙・喉音声母の下においてのみ、

「開」・「合」・「齊」3呼が揃った上になお「撮口呼」が存在し、四呼が完備しているのである。あるいは、呉澄らが牙音合口三・四等字の字母を増した原因は、これら他の声母の音節とつりあいのとれない牙・喉音の「撮口呼」の扱いに困じてのことではないか。方以智の表現は或いはそのようなことを意味しているとも考えられる。もっとも、呉澄の掲げる代表字のうち、「圭」・「危」・「威」等「止」・「蟹」攝三・四等（及び「灰」・「泰」）韻合口の字は後に[-i-]介音の要素を失って「合口呼」に変化していった字であるから、この点不完全な説明しかできない嫌いがある。また、呉澄は同様の条件下にあると思われる「曉」母については同じような増加を行っていない。或いは三十六個という数に合わせるために不徹底な結果になったということだろうか。

もう1つの解釈は、これが [tɕ] [tɕ'-] [dz-] のような舌面音声母の派生を背景としているというものである。曹氏の『音韻学辞典』は次のように述べている。

「《切韻指掌图节要》见溪群三母依开合口分化为两组，开口代表字“经坚、轻牵、擎虔”，合口代表字“肩涓、傾圈、琼拳”。吴氏则进一步分“见溪群疑”四母为“见溪芹疑圭缺群危”八母。很可能，当时这一系的声母中已有 [tɕ] [tɕ'-] [dz-] 的萌芽。」

従来元朝時代の韻書が反映する音ではまだこれら牙・喉音から派生した舌面音声母は生まれていないという推定が多くなされているが、趙蔭棠氏の『中原音韻研究』はそうではなく、その傍証として呉澄の字母を挙げて、

「元朝有吳草廬者，對於見系四母增爲：

見溪芹疑

圭缺群危

這分明是舊日的見母等不足以代表粗音，故別立圭等母。」

と述べている。「見」等の字はすでに [tɕ-] の種の音になっており、「粗音」[k-] 等のために別に字母を立てたという解釈である。趙氏はこのような考えに基づき、『中原音韻』の声母として [k-] [k'-] [x-] (中古「見」「溪」「群」「曉」「匣」母一・二等)<sup>(9)</sup> の他に [tɕ-] [tɕ'-] [ɕ-] (中古「見」「溪」「群」「曉」「匣」母三・四等) を立てたのであった。

この趙氏の考え方に対し、同じく『中原音韻』の研究をしている李新魁氏は反対しており、これは蒙古語において舌根音が2組に分かれる（よって2組に書き分ける）ことの影響を受けた人為的な区別であるとみなしている。蒙古語では異なる母音調和の組に属する母音と結合することによって [k] [g] と [q] [G] という2系列の頭子音があり、この中国語にはない区別を中国語の音の記述に持ち込んだことで、『蒙古字韻』や『古今韻会举要』における牙・喉音音節の区分が行われた。呉澄はこれにならって、舌根音の声母を「齊齒」と「合口」の2種に分けたというのである（『《中原音韻》音系研究』pp. 78-81）。李氏は元代に蒙古語の学習がどれほど漢人に強制されたかを力説しているが、確かに『呉文正文集』の中には2篇ほど、「国字」或いは「八思巴字」の功績を称賛した文章があり、表音文字が機能的なことや中土の音韻学が仏教系の学問の影響を受けていることなどを述べている<sup>(10)</sup>。この李氏の見解がいわば3つ目の解釈であるとも言えようか。或いは上の方以智のような解釈と合わせて、呉澄の「増母」が実際の声母の違いを反映するものではないとする説であると表現してもよさそう。

さて上の『古今韻会举要』における牙・喉音字の分類のしかた、すなわち同書が中古二等韻の開口牙・喉音字を独立した「字母韻」に属せしめ、三・四等牙・喉音字を細分し（対立させ）ている事実に基づいて、当時すでに舌面音声母の派生が起こりつつあったと推定しているのが、寧忌浮氏の『古今韻会举要及相関韻書』である。氏は、『古今韻会举要』の言語にあっても、中古三・四等韻の区別はもう失われており、それらが2つの「字母韻」に分けられているものはいく

つかは、韻母の違いではなく、牙・喉音が舌面音化しているか否かを基準として分類されたものであると考えている。そしてそれら牙・喉音音節の対立状況から、『古今韻会挙要』系の韻書にあっては、牙・喉音声母（舌根音）は中古二等韻開口と四等韻（純四等韻及び「清」・「幽」2韻を指す）、及びいくつかの重紐韻で四等に置かれる音節において、三等韻にさきがけて舌面音化（[tɕ, tɕʰ, ɕ-]）が起こっており、この変化は摩擦音においてより速く進行していたと見られ、「曉」母の字は一部他の三等韻のものも舌面音化しているようすが観察されると結論している<sup>(11)</sup>。

また日本側では、尾崎雄二郎氏が「大英博物館本蒙古字韻札記」において、『蒙古字韻』の朱宗文の序に「始めて見経堅のgたるを知る。」という1句のあることに注目し、「わたしは朱宗文の序文から、かれの属する方言においては、牙音四等において、牙音はすでに舌面音化しているであろうことを推定した。」と述べた。そして「朱宗文の言語」については「いわゆる官話系の言語群のうちには入るものだと考えてよければ（それは許されるはずだが）」とされた。尾崎氏の説は『蒙古字韻』の記述から元代のある言語における舌面音化の存在を推定したのであって、『古今韻会挙要』が想定する音がどのようであるかについて明言した部分はないが、それを承けた花登正宏氏の「蒙古字韻ノート」は、それを『古今韻会挙要』の「字母韻」の分類と結びつけて論じている。すなわち、『蒙古字韻』の牙音開口二等字「交」に対するパスパ字の音注に「dzew」が現れることを紹介し、それと『古今韻会挙要』に見られる特異な「字母韻」の分類のしかたを根拠として、「四等牙音字が舌面音化しているという事実のほかに、少くとも開口二等・三等の牙音字の一部には明らかに舌面音化したものが存在する」と推定した<sup>(12)</sup>。

しかし、上の呉澄が掲げる字母や（陳晋翁の）「助紐字」を見ると、開口・合口どちらにも中古四等韻（及び重紐四等）と三等韻（及び重紐三等）の字が混じっており、上記のような基準で判然と分かれているようすは見えない。例えば開口の方では、「群」母の字母とされている「芹」字は『古今韻会挙要』では「巾字母韻」であって、「曉」・「匣」母のみから成る「欣字母韻」と対立しているが、寧忌浮氏の推定では（摩擦音の方がほかの声母より舌面音化が早いという結論に関連するのであるが）舌面音化があるのは「欣」の方である。「助紐字」のうち、「経」と「軽」はまぎれもない四等及び重紐四等字であるが、2つは「経字母韻」に属し、それに対して「擎」は「京字母韻」である。「山」撰の字の方では、「堅」と「牽」が四等字で「堅字母韻」であるのに対し、「虔」は「韃字母韻」である。もっとも、寧忌浮氏が特に同じ声母の下で2つの「字母韻」に属する小韻が対立していることに注目し、それを韻母の違いではなく舌面音化のあるなしの違いに基づくこととされるのであれば、氏の言うところに従えば「四等韻に群母はない」のだから、対立する相手のない「群」母字が継子になりやすいのは理由のあることである。つまり氏の考えでは韻母の違いはないのであるから、別の組の「字母韻」に入れられる可能性もなしとしない。が、厳密に牙・喉音声母に舌面音化があるかどうかを基準として「字母韻」を分けたのであれば、明らかに舌面音化があるものは対立の有無に関わらず同じ「字母韻」に入れられそうなものである。また寧忌浮氏に従えば、当該諸韻では開口・合口の区別なく舌面音化しているようであって、開・合を基準として差異が起こっているようすではない。例えば、陳晋翁の合口の「助紐字」のうち「扇」・「傾」・「涓」は寧忌浮氏の「四等」字の系列に属し、「瓊」・「拳」はそれぞれ上記諸字と同じ字母韻（「雄字母韻」と「涓字母韻」）に属していて、舌面音化が起こっている方に含まれる。字母字の「缺」も「玦字母韻」に属し「厥字母韻」と対立しており、舌面音化が起こっていると推定される字に入っている。

『古今韻会挙要』や『中原音韻』に牙・喉音の舌面音化が見られるかどうかはそもそも問題なのではあるけれども、かりにそうであったとしても、この時代に開口の方が合口（後の「撮口呼」

も含む)よりも早く舌面音化が始まっていた言語があって、開口の方ではそれが『古今韻会舉要』で別の字母韻に分類されている音節にまで及んでいたという可能性がないと、舌面音化の方向から呉澄の字母は解けないように思われる。なお「疑」母が分かれたところの「疑」・「危」2母の区別については、『古今韻会舉要』では「疑」字は「疑」母、「危」は「魚」母の字であって、ちょうど [ŋ-] と零声母(合口)の違いに匹敵するので、『古今韻会舉要』から解くことは可能である。

次に、いわば定石であるところの作者の出身地(「籍貫」)の現代方言を参照してみたい。呉澄は『元史』の本伝などによれば、撫州崇仁の人である。『中国歴史地図集』や『元史』の「地理志」によると当該地は元の江西行省(「江西等处行中書省」)撫集路に属する県で、今の江西省崇仁県にあたり、臨川市や撫州市の南西に位置している。同じく『元史』の伝等によれば、呉澄はその生涯の中で、講官を命じられたり『英宗実録』の編集などのために都に赴任したこともあるが、そのほかは(江浙などに旅行はしているが)郷里やその近くにあつて学問を講じて暮らしていたらしく、「楽安」や「龍興」などの地に居たことが見え、「江西儒学副提挙」に任じられたこともある。楽安県や龍興(同行省所属の路「龍興路」を指すかと思われる)も同じく江西行省の北部に位置する土地である。「楽安」は『切韻指掌図節要』の作者陳晋翁の出身地でもある。また呉澄は死後に「江西行省左丞、上護軍」を追贈され、「臨川郡公」に追封されたと述べられている。現代の漢語方言では、崇仁は、贛方言のうちの臨川市や撫州市・楽安県などと同じ下位方言に属している。代表的な臨川市や撫州市の音系を見ると、牙・喉音声母(「見」・「溪」・「群」・「曉」)は拗音音節では開・合ともにほぼ舌面音化しており、「疑」母は拗音音節でしばしば [ŋ-] になっている。零声母は開口直音音節で [ŋ-] が添えられるものの、「影」字や「威」字の発音についてはそういうことはない。

さていま劉綸鑫氏主編『客贛方言比較研究』の単字音表によって呉澄「序」の「字母」と「助紐字」に関連する諸韻の読音を見て行くと、贛方言の中には、それらの諸韻で中古牙・喉音の三・四等のものが、直音化したものを除きほぼ一律に舌面音化(口蓋化)している方言と、一律に舌根音 [k-] 等のままである方言(たとえば黎川のように)の両方があるけれども、そのほかにいくつか、開口拗音音節では舌面音化しているが合口三・四等(の一部)ではそうなっていない状態を示す<sup>(13)</sup>方言がある。以下のような地点でそのような状況が存在するようである。

星子 永修 修水(贛方言 南昌片) 楽平 (同 波陽片)

上高 万載 (同 宜春片) 東郷 南豊 宜黄(同 臨川片)

上記のような地点で、中古「止」・「蟹」撰、「臻」撰、「山」撰、「梗」撰三・四等合口(入声を含む)の「見」・「溪」・「群」母字が舌面音化しているかどうかを、していれば「+」、していなければ「-」として表にすると、以下ようになる。なおすべてにおいて [k-] [k'-] [tɕ-] [tɕ'-] 等の音が現れるわけではなく、例えば星子・永修・修水では「溪」母や「群」母が全濁音で出ている。

	星子	永修	修水	楽平	上高	万載	東郷	南豊	宜黄
止・蟹	- (1)	- (1)	- (1)	- (1)	-	-	- (1)	-	- (1)
臻	-	-/+ (2)	-	-	-	-	+/- (3)	-/+ (4)	-/+ (5)
山	-	-	-	-	-	-	+/- (6)	+	-
梗	+	+	+	+	-	-	+	+	+

(1)但し「季」字は星子・永修・修水・楽平・東郷・宜黄で [tɕi]。例外とみなす。

- (2) 永修「菌」[dz<sup>h</sup>in]、「橘」[kui<sup>?</sup>]、「軍」[kuin]、「屈」[dz<sup>h</sup>iu<sup>?</sup>]、「裙」[g<sup>h</sup>uin]  
 (3) 東郷「菌」[tɕ<sup>h</sup>in]、「橘」[kuət]、「軍」[tɕin]、「屈」[tɕ<sup>h</sup>it]、「裙」[k<sup>h</sup>un]  
 (4) 南豊「菌」[tɕyn]、「橘」[kuit]、「軍」[kuin]、「屈」[k<sup>h</sup>uit]、「裙」[k<sup>h</sup>uin]  
 (5) 宜黄「菌」[tɕin]、「橘」[kuit]、「軍」[kuən]、「屈」[tɕ<sup>h</sup>iu<sup>?</sup>]、「裙」[k<sup>h</sup>uən]  
 (6) 東郷「卷」[kuon]、「圈」[k<sup>h</sup>uon]、「拳」[k<sup>h</sup>uon]、「勸」[tɕ<sup>h</sup>ion]、「決」[tɕiət]、「缺」  
 [tɕ<sup>h</sup>iət / k<sup>h</sup>uet]

「止」・「蟹」撰三・四等合口の字は普通話などでもそうであるように、これらの地区でも直音化して [kui] [kuei] [kuëi] 等のようになっているので、すべての地点で舌根音のままの形式が現れている。また「臻」撰・「山」撰までは舌面音になっていない（もしくは不徹底である）ものの、「梗」撰では舌面音が現れている地点が多い。上高・万載では全部の撰において舌面音になっていない。これらの地点で、舌面音化が起こっている開口の音節では韻母は [i] や [y] で始まる拗音であるが、上のような舌根音が現れる合口字では韻母はおおむね [i] で始まらない。例外として楽平・上高の例があるが、それらは [-i] [-in] [-ien] [-ie] のような「齊齒呼」の音節になっており、[y] や [iu] で始まる例はなく、つまり「撮口呼」では現れない模様である<sup>(14)</sup>。例えば、

	星子	永修	修水	楽平	上高	万載	東郷	南豊	宜黄
桂	kui	kui	kui	kuei	ki	kuëi	kui	kui	kui
軍	kɕin	kuin	kuin	kən	kin	kuin	tɕin	kuin	kuən
圈	ɕiɛn	g <sup>h</sup> uen	guen	k <sup>h</sup> iɛn	k <sup>h</sup> ɛn	k <sup>h</sup> uen	k <sup>h</sup> uon	tɕ <sup>h</sup> yɛn	k <sup>h</sup> uen
缺	guie	g <sup>h</sup> ue <sup>?</sup>	guel	k <sup>h</sup> iɛ <sup>?</sup>	k <sup>h</sup> ɛt	k <sup>h</sup> ue <sup>?</sup>	tɕ <sup>h</sup> iət / k <sup>h</sup> uet	tɕ <sup>h</sup> yɛl	k <sup>h</sup> uet
瓊	dziŋ	dz <sup>h</sup> iəŋ	dzin	tɕ <sup>h</sup> iuŋ	k <sup>h</sup> in	k <sup>h</sup> un	tɕ <sup>h</sup> iuŋ	tɕ <sup>h</sup> iuŋ	tɕ <sup>h</sup> ioŋ

また、これらの韻において「疑」母はだいたい [u-] [v-] [ŋu-] など始まり、拗音音節ならば [ŋ-] が現れる。同じ牙・喉音でありながら「曉」母については呉澄は新しい字母を立てていないが、上記のような地区では「曉」母は拗音音節では [ɕ-] であるが、合口では [f-] に合流している。ただし牙音声母に比べて舌面音化した拗音音節で現れる程度が高いようである。また、開口音節では [h-] で現れる。なお楽平は例外で開口・合口とも [h-] で現れる。

現代方言における上記のようなものつまり、中古三・四等開口のみにおいて舌面音化がおりそのほかは（三・四等合口も含め）そうならないような方言現象が呉澄の時代にもあってそれが呉澄の言語に影響を及ぼしていたと仮定できるなら、説明上ずいぶん都合がよいように思われる。なお上のような方言では「曉」母合口が別の声母と合流してしまっているわけだからなおさら都合がよい<sup>(15)</sup>。筆者は現代方言に関する知識が浅いため、贛方言における牙・喉音の舌面音化が、また全漢語方言を通じてのそれが、いつごろからどのようなプロセスをもって起こった（或いは起こりつつある）ものなのかよくわかっていないので、その可能性の是非が判断できないし、したがって現在のところこれ以上の憶測は避けざるを得ず、識者のご指摘を待ちたいと思う。

また、かりにまだ舌面音化が現れていなかったとしても、例えば上の万載のように、牙音では中古三・四等合口字の韻母が一律に [u] で始まるような形式、すなわち「合口呼」になってい



たならば、呉澄の挙げるような例字をもってしても、牙・喉音の開口音節と合口音節の開始部分を「声介合母」のような方法で区別することが可能である。或いは、開口拗音韻母の前、すなわち [i] に先立つ場合の [k-] 等と、合口介音の前、すなわち [u] に先立つ前の [k-] 等の音声的差異に注目して字母を分けたもの、と考えることも可能である。この点についても、これを呉澄の言語において想定するならば、現時点の筆者の知識では単に憶測を逞しゅうすることにすぎなくなるのでこれ以上の推論は避けておきたい。

## 2. 『周易』「雜卦伝」の押韻

呉澄は『通志堂経解』にも取られている『易纂言』の「雜卦伝第十」において、「雜卦伝」の本文を10節に分け、その各節について句数と韻数（押韻の数。一連の押韻字が何組あるか。複数ならば途中で換韻が行われていることになる。）を各節の解説の最後に明記している。例えば第1節「乾剛坤柔」から「或与或求」までについて「此一節六卦四句一韻」と記しているような具合である。このような注記から呉澄の「雜卦伝」の押韻字の認定のしかたを推測することが可能である。

まず対照するために、清・江有誥『群経韻読』を引いておきたい。同書は「雜卦伝」の本文を全文掲げているのでここでもそうすることとし、各句に番号を付した。江氏の認める押韻字は「〈 〉」でくくり、江氏の押韻字に対する注と韻部の表示をかつこに入れて示した。なおくぎりの印『 』は音韻学叢書の同書にもとから付されているものである。

1 乾剛坤〈柔〉、2 比樂師〈憂〉、3 臨觀之義、4 或与或〈求〉（幽部）、／5 屯見而不失其〈居〉（：去声）、6 蒙雜而〈著〉（魚部）、／7 震〈起〉也、8 艮〈止〉也、9 損益盛衰之〈始〉也、10 大畜〈時〉也、11 无妄〈災〉也、12 萃聚而升不〈来〉也、13 謙輕而豫〈怠〉（：徒其反）也、14 噬嗑〈食〉也、15 賁无〈色〉（：史入声）也、16 兌見而巽〈伏〉（：房逼反）也、17 隨無故也、18 蠱則〈飭〉也（之部）、／19 剥〈爛〉（：音練）也、20 復〈反〉（：去声）也（元部）、／21 晋〈晝〉也、22 明夷〈誅〉（：音味）也、23 井通而困相〈遇〉（：音余晝反）也（侯部）、／24 咸速也、25 恒〈久〉（：音己）也、26 渙離也、27 節〈止〉也（之部）、／28 解〈緩〉（：胡卷反）也、29 蹇〈難〉（：奴暗反）也（元部）、／30 睽外也、31 家人〈内〉也、32 否泰反其〈類〉也、33 大壯則止、34 遯則〈退〉也（脂部）、／35 大有衆也、36 同人〈親〉也、37 革去故也、38 鼎取〈新〉也、39 小過過也、40 中孚〈信〉（：平声）也（真部）、／41 豐多〈故〉（：上声）也、42 親〈寡〉（：音古）旅也（当作旅親寡也）、43 離上而坎〈下〉也、44 小畜〈寡〉也、45 履不〈処〉也（魚部）、／46 需不〈進〉（：平声）也、47 訟不〈親〉也、48 大過〈顛〉（：徳因反）也（真部）、／49 姤遇也、50 柔遇〈剛〉也、51 漸女婦待男〈行〉也（陽部）、／52 頤養〈正〉也、53 既濟〈定〉也（耕部）、／54 婦妹女之〈終〉也、55 未濟男之〈窮〉也（中部）、／56 夬決也、57 剛決〈柔〉也、58 君子道長、59 小人道〈憂〉也（幽部）

この本文に対し、呉澄が付けた押韻の注記は次のようなものである。呉澄は宋の蔡淵以来の学説を継承して第48句目以下の句の順番を改訂している<sup>(16)</sup>。

1-4 (句)「此一節六卦四句一韻」

5-9「此一節六卦五句二韻」

10-13「此一節六卦四句一韻」

14-18「此一節六卦五句一韻」

19-23「此一節六卦五句二韻」

24-29「此一節六卦六句二韻」

30-34「此一節六卦五句一韻」

35-40「此一節六句一韻」

41-45「此一節六卦五句一韻」

46-59（呉は 46・47・48・52・53・55・54・51・49・50・56・57・58・59）：「此一節十卦十四句五韻」

これらの注記から推測するに、呉澄が認める押韻字はだいたい次のようではないかと考えられる。各押韻の組には便宜上番号を付けておく。

①柔1 憂2 求4 ②居5 著6／③起7 止8 始9 ④時10 災11 来12 怠13 ⑤食14 色15 伏16 飭18 ⑥爛19 反20／⑦晝21 誅22 遇23 ⑧久25 止27／⑨緩28 難29 ⑩内31 類32 退34 ⑪親36 新38 信40 ⑫故41 旅42 下43 寡44 処45 ⑬進46 親47 顛48／⑭正52 定53／⑮窮55 終54／⑯行51 剛50／⑰柔57 憂59

（押韻の組ごとに①等の番号を付け、押韻字には現れる句数を注記し、節の切れ目は『 』』で表示した。「 / 」は節内で換韻が行われていると認められる場所である。第42句目について、江有誥は「親寡旅也」を「当作旅親寡也」として「寡」を押韻字としているが、呉澄の場合は本文が「親寡旅也」のままなので「旅」が句末字で押韻しているとみなしておいた。）

この押韻字から見ると、呉澄の認める押韻は、古韻研究が発達した清朝の江有誥の見解に照らして見てもかなり穏当なところをついている。呉澄は第48句以下の句の順番を変えているのだが、それでも江有誥の認める押韻字の組を崩していない。各韻の中には、中古音の十六撰に照らして別撰の字が混在しているところがあるし、異声調字が混じっているところもあるがそれらの難題もちゃんと乗り越えられている。参考までに、それら問題になる字の古音について呉澄に先立つ古韻学の業績である宋・呉棫の『韻補』がどのようなことを古音を考証しているか、また時代が下って明の陳第の『毛詩古音考』がどのような古音を想定しているか（どちらも必ずしも「雑卦伝」の文字について考証した古音ではないが）を引いてみよう。

②居 呉：車御切（巻四 去九御）

陳：音倨（去声）（「旁証」に「雑卦伝」5～6句を引く。）（巻一）

④災 呉：牋西切（巻一 上平五支）

陳：なし

来 呉：陵之切（巻一 上平五支）

陳：音釐（巻一）

怠 呉：盈之切（解説に「雑卦伝」13句を引く。）（巻一 上平五支）

陳：音以、亦読怡（解説に「雑卦伝」12～13句を引き、怠音怡、来音釐とする。）（巻三）

⑤伏 呉：筆力切（巻五 入五質）

- 陳：音逼（「旁証」に「雜卦伝」16～18句を引く。）（卷三）
- ⑥爛 吳：郎旬切（卷四 去三十二霰）  
陳：なし
- 反 吳：孚絢切（卷四 去三十二霰）  
陳：音販（「旁証」に「雜卦伝」19～20句を引く。）（卷二）
- ⑦誅 吳：株遇切（卷四 去九御）  
陳：なし
- 晝 吳：株遇切（卷四 去九御）  
陳：音注（卷四）
- ⑧久 吳：苟起切（卷三 上四紙）  
陳：音几（「旁証」に「雜卦伝」24～27句を引く。）（卷一）
- ⑨緩 吳：熒絹切（卷四 去三十二霰）  
陳：なし
- 難 吳：乃絹切（卷四 去三十二霰）  
\*陳：音年（「古声平、与天叶。今声去、与翰叶。」）（卷二）
- ⑩内 吳：今音濁叶泰、古音清叶志（卷四 去五寘）  
陳：なし
- 退 吳：吐内切、今音濁叶隊、古音清叶志（卷四 去五寘）  
陳：なし
- ⑫故 吳：果五切（卷三 上八語）  
\*陳：平声（「古有平去二音。」）（卷三）
- 下 吳：後五切（卷三 上八語）  
陳：音虎（「不特六経、古音皆然。」）（卷一）
- 寡 吳：果五切（卷三 上八語）  
陳：音古（「旁証」に「雜卦伝」43～45句を引き、「下43」に「音虎」と注す。）（卷三）
- ⑬進 吳：資辛切（解説に「雜卦伝」46～47句を引く。）（卷一 上平十七真）  
陳：なし
- 顛 吳：典因切（卷一 上平十七真）  
陳：音真（「旁証」に「雜卦伝」47～48句を引く。）（卷二）
- ⑭行 吳：寒剛切（卷二 下平十陽）  
陳：音杭（卷一）

上記中、陳第の古音の表示の前に（「陳」の前に）「\*」を付けたものは、当面の「雜卦伝」の音読としては（特に声調が）適当でないと思われるものである。『毛詩古音考』がもともと『詩経』を中心に編集されているので、そのほか取り上げられていない字も多いし、いたしかたないことかと思われる。

それはさておき、『韻補』と『毛詩古音考』所掲の古音から、この「雜卦伝」の押韻を読み解くにふさわしい、かつ、その中のいくつかは清の江有誥にまで受け継がれる読みが、彼らによって少なくとも南宋初期ころから用意されていたことが見て取れるわけで、呉澄もこのような大きな古音学の流れのなかに位置していたとみなしてよいのではなからうか。もちろん、「今韻」の

体系から見て、押韻が合わない部分を解決するべく呉澄が想定している読音が呉棫や陳第と同じであったかどうか断言はできない。たとえば、「晝21 誅22 遇23」の部分の押韻などは、全部を(呉や陳のように)中古「遇」韻の音にそろえても、(江のように)「宥」韻の音にそろえても韻は調和するわけである。しかしながら、「雜卦伝」のどれどれの字が互いに押韻しているかという認定のしかただけに限定して言うならば、呉澄は前代から後代へと引き継がれる古音学の正しい道筋を誤りを犯すことなく継承したと言えるのではなからうか。もちろん、それが呉澄個人のみの見識によるものでなく、当時見ることの出来た『易』学の業績の中から何らかの説を継承している可能性はあり、その点などはさらなる調査が必要であろう。

だがちなみに、筆者が前稿<sup>(17)</sup>で取り上げた同じ元朝人である熊朋來の『熊氏經說』などは、「雜卦伝」の本文の改訂に関しては呉澄と同じ案に従いながら、その押韻字に関しては、後世明らかになった上古音の韻部に照らして見ればかなり無理のある認定のしかたをした部分を含んでいるのである。参考までに前稿で筆者が推定した熊朋來の認める押韻を以下に掲げておきたい。「:」以下に引かれているのは熊朋來の原注である。

柔1 憂2 求4 / 居5 : 協据 著6 / 起7 止8 始9 時10 : 協是 災11 : 協洋 / 来12 : 協厘去声 怠13 : 協棟、京氏怠字作治、於韻亦正協 / 食14 色15 伏16 : 協關 飾18 : 或作飭 / 爛19 反20 / 晝21 誅22 : 協味、晝遇二韻皆通 遇23 / 久25 : 協已 止27 / 緩28 難29 : 去声 / 外30 内31 類32 : 協未 退34 / 親36 新38 信40 : 音申 / 故37 遇39 (過?) : 故遇、新信互韻 / 故41 : 協古 旅42 下43 : 協虎 寡44 : 協古 処45 / 進46 : 協津 親47 顛48 : 滴音切 正49 : 協真 定50 : 協江 / 窮51 : 協強 終52 : 協章 行53 : 協杭 剛55 / 柔57 憂59 : 韻始於柔憂、終於柔憂。

アンダーラインを付けた部分が、上古音の韻部を正しくとらえていないと認められる部分である。1つ目は上古「魚」部と「侯」部に属する中古「遇」撰の字を押韻しているとみなしているもの。2つ目は先の呉澄の⑬と⑭、上古「真」部と「耕」部の字が押韻しているとみなされているもので、[-n] 韻尾と [-ŋ] 韻尾の通韻にかかる。このような韻での異韻尾の混押を認めるのは呉棫や陳第らにおいても見られる現象である。3つ目は呉澄の⑮と⑯、上古「中」部と「陽」部の字が押韻しているとみなされているものである。なお、前稿では、「離26」に「去声」という音注が付されているため、「久25」・「止27」と一連の押韻を形作っていると認められているものと見なしたが、「離」字については、『韻補』でも「良何切」の音が付けられていて、これが後にいうところの「歌」部の字であることが気づかれていたようであるし、「去声」の声調も「久:音已」・「止」(上声である)と合わないので、これが押韻と関連しない音注である可能性も高いことから、今回押韻字の中から省いておいた。

この例に比べれば呉澄の認める押韻字のほうがずっと穏当であることは言うまでもないと思う。熊朋來は『元史』の本伝や『宋元学案』によると「豫章」の人とあり、これはいわば旧時の地名を用いたものと思われ、『元人伝記資料索引』では「豊城」の人とされている。今の江西省南昌市の西南に位置する県で、呉澄と同じ江西省中北部の人であるし、同『索引』によれば生卒年は西暦1246～1323年ということであるから、時代的にも呉澄とほとんど変わらない。方言的な条件の差というより、どのような韻が調和し得るかという見解の違いが差異のある判断を生んだということであろうか。両者の学統においてどのような『詩経』の学、古音の学が継承されていたのかなど、なお調査すべきことは多いけれども、それらは今後の課題としたい。思い起こ

せば、『中原音韻』を作った周德清やその成立・刊行と係わった人々の何人かもこの江西の人であって<sup>(18)</sup>、元朝時代ころの江西は音韻学史上無視できない土地と言わねばならない。また、同じ元朝時代の韻書『古今韻会举要』の成立にかかわった黄公紹と熊忠は福建省邵武の人である。そして、呉棫や朱熹や陳第らの存在を考えると、江西と境を接するこの福建という地域がまた、初期の古音学の発達にはなはだ関わりが深いのであった。

## 注

- (1) 『元史』巻百七十一の呉澄の本伝には、元天暦三年(1330)の翌年六月に病を得、歳八十五で逝去したという記述があって、この記述に基づき至順二年(1331)に卒したとして逆算すると、生卒年は1247～1331となる。しかし『呉文正集』附載の「年譜」は元の至正二十五年(1365)すなわち卒後30余年後の序のあるものだが、それは南宋・淳祐九年正月生、元・元統元年六月卒としている。そして『宋元学案』巻九十二の呉澄の伝が、元統元年(1333)に八十五歳で卒したとし、『元人伝記資料索引』が生卒を1249～1333とするのもこれに一致している。今この後者に従う。『元史』の場合、或いは、発病してから逝去するまでに2年の時間が経過しているのを明述していないのもあろう。
- (2) 『韻学古籍述要』は、その「前言」によると、李新魁氏が1964年から約20年をかけて全国各地の図書館で韻学関係の著作を調査し、300種にわたる書籍の「提要」を執筆したものを基礎に、それを増補整理してできあがったものである。
- (3) 筆者は原書未見。王力氏の『漢語音韻学』が第一編第三章「等韻学」の「参考資料」「潘耒論字母」に引用している原文による。
- (4) 筆者は原書未見。耿振生氏の『明清等韻学通論』pp. 39-40が述べているところによる。
- (5) 同(4)。
- (6) 『近代漢語音論』所収。初出は『中国語言学報』第3期(1988)。
- (7) 『近代漢語音論』所収。初出は『中国民族古文字研究』(1984 中国社会科学出版社)。
- (8) 中古音の認定に際しては、『広韻』・『集韻』・『方言調査字表』・『漢字古音手冊』により、他の字音とのバランスを考え、適当と思われる代表的な読音のみを掲げた。
- (9) 但し、二等については時に [c-] [c'] [ç-] 等の音が用いられることがあったと注している。例えば、「高」(一等)は [kau]、「交」(二等)は [cau]、「嬌」(三等)は [tcau] である。
- (10) 卷二十五「送杜教授北帰序」と卷五十「南安路帝師殿碑」。
- (11) 同書第一章「導言」第四節「字母韻不等于韻母」・第五節「tc、tc'、ç 的產生」
- (12) 但し、花登氏は1997年の『古今韻会举要研究』においては、『古今韻会举要』の声母として舌面音子音を推定してはおられないようである。また、尾崎氏や花登氏に先だって坂井健一氏が、やはり『古今韻会举要』の「字母韻」と『蒙古字韻』のパスバ字表記に基づいて、牙音四等字が口蓋化(舌面音化)していたと推定している由であるが、筆者はまだ未読。
- (13) 但し、中古開口三・四等字であっても、下記の上高では梗撰三等清韻開口の「鏡」・「頸」・「輕」が直音の [tsan] [tsan] [san] で現れる。また後で述べるように、同じ牙・喉音の声母でも、摩擦音の「曉」母は「見」・「溪」・「群」母に比べ、合口でも舌面音化しているものが多いようである。なお、以下『客贛方言比較研究』からの方言音の引用にあたって声調はすべて省略する。

- (14) 陳昌儀氏の『贛方言概要』は「余干片」(『客贛方言比較研究』の「波陽片」にあたる)の万年県・余江県では「遇」・「山」・「臻」摂合口三等韻「見」・「曉」組の字は [k-] [k'-] [f-] に発音されるが韻母は「撮口呼」であると述べている (p.28)。余江では「臻」摂のそれは一等と合流して [yn] になっているごとくである (pp.30-31) が、『客贛方言比較研究』の万年・余江の「声韻調系統」の表にはこれらにあたる「撮口呼」の韻母が見あたらない。
- (15) 尾崎雄二郎氏の前掲論文に取り上げられているところの、パスパ字の書体では f-と hu-がよく似ているという事実が、この呉澄の字母で「曉」母が分割されていないということとはたして何らかの関連を持ちうるものかどうか、筆者は現在よくその考証をなしえない。
- (16) 富平美波「熊朋来の古韻学 (二)」(山口大学アジア歴史・文化研究会編『アジアの歴史と文化』第4輯 2000) 参照。
- (17) 「熊朋来の古韻学 (二)」(山口大学アジア歴史・文化研究会編『アジアの歴史と文化』第4輯 2000)
- (18) 李新魁氏『《中原音韻》音系研究』pp.39-40。

## 文献目録

- 『易纂言』(元) 呉澄撰 通志堂経解 (台湾・大通書局 康熙19年刻本影印、1969中文出版社刊) 所収
- 『呉文正集』(元) 呉澄撰 四庫全書珍本所収
- 『熊氏経説』(元) 熊朋来撰 通志堂経解所収
- 『方以智全書』第一冊・第二冊「通雅」(明) 方以智撰 1988 上海古籍出版社
- 『古今积疑』(清) 方中履撰 1988 江蘇広陵古籍刻印社
- 『国立図書館蔵本 古今积疑』(清) 方中履撰 1971 台湾学生書局 (雑著秘笈叢刊 11)
- 『切字积疑』(清) 方中履撰 昭代叢書 (1990 上海古籍出版社 拋道光世楷堂刊本影印) 所収
- 『古今韻会举要』(元) 黄公紹編輯、熊忠举要 1979 大化書局 (拋光緒9年淮南書局重刊本影印)
- 『古今韻会举要』(元) 黄公紹・熊忠著 寧忌浮整理 2000 中華書局 (拋明嘉靖15年刻17年重修本影印)
- 『宋本韻補』(宋) 呉棫撰 1987 中華書局 (拋遼寧図書館蔵宋刻本影印刊)
- 『毛詩古音考』(明) 陳第撰 康瑞琮点校 1988 中華書局
- 『江氏音学十書』(清) 江有誥撰 音韻学叢書 (1987 広文書局) 所収
- 『小学考』(清) 謝啓昆撰 1974 芸文印書館
- 『元史』(明) 宋濂等撰 1976 中華書局
- 『宋元学案』 上海文瑞楼刊本
- 『元人伝記資料索引』 1987 中華書局
- 『中国歴史地図集』第六冊・第七冊 1982 地図出版社
- 『韻学古籍述要』李新魁・麦耘著 1993 陝西人民出版社
- 『音韻学辞典』曹述敬著 1991 湖南出版社
- 『漢語音韻学』王力著 1972 中華書局香港分局
- 『漢語等韻学』李新魁著 1983 中華書局
- 『明清等韻学通論』耿振生著 1992 語文出版社

- 『中原音韻研究』趙蔭棠著 1984新文豐出版社  
 『中原音韻音系』楊耐思著 1981中国社会科学出版社  
 『《中原音韻》音系研究』李新魁著 1983中州書画社  
 『中原音韻表稿』寧繼福著 1985 吉林文史出版社  
 『近代漢語音論』楊耐思著 1997 商務印書館  
 『古今韻會舉要的語音系統』竺家寧著 1986 台湾學生書局  
 『古今韻會舉要及相關韻書』寧忌浮著 1997 中華書局  
 『古今韻會舉要研究 — 中国近世音韻史の一側面—』花登正宏著 1997 汲古書院  
 「大英博物館本蒙古字韻札記」尾崎雄二郎著 1961 『中国語音韻史の研究』(1980 汲古書院)

所収

「蒙古字韻ノート—特に開口二等牙音の舌面音化について」花登正宏著 『中国語学』226 期(1979)

所収

- 『贛方言概要』陳昌儀著 1991 江西教育出版社  
 『客贛方言調查報告』李如龍・張双慶主編 1992 廈門大學出版社  
 『客贛方言比較研究』劉綸鑫主編 1999 中国社会科学出版社  
 『臨川音系』羅常培著 『羅常培文集』第一卷(1999 山東教育出版社) 所収  
 『規律与方向：變遷中的音韻結構』何大安著 1988 中央研究院歷史語言研究所  
 『宋本廣韻』(宋) 陳彭年等重修 1976 芸文印書館(拋沢存堂本)  
 『宋刻集韻』(宋) 丁度等編 1989 中華書局(拋北京圖書館藏宋刻本)  
 『方言調查字表(修訂本)』中国社会科学院語言研究所編 1981 商務印書館  
 『漢字古音手冊』郭錫良著 1986 北京大學出版社